

東京都写真美術館コレクション展

自然の鉛筆 技法と表現

The Pencil of Nature: Technique and Style

主催：東京都 東京都写真美術館

協賛：凸版印刷株式会社 協力：平凡社

会期：2012年7月14日(土)～9月17日(月・祝)

会場：東京都写真美術館3階展示室

ウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボット
植物の葉 「自然の鉛筆」より 1844年
カロタイプ フォトジェニック・ドローイング



展覧会概要

東京都写真美術館では、当館のコレクションに基づく展覧会「自然の鉛筆 技法と表現」を開催いたします。

ダゲレオタイプ（1839年）とカロタイプ（1840年）のふたつの写真術が発表されて以来、写真は常に「光学」と「化学」の変遷によって表現の幅を拡げていきました。本展では、写真における「化学」に焦点をあて、プリント技法の変遷と表現、印画紙の古典技法と現代表現や、モダニズムにみるカメラレス・フォトグラフィなどにスポットをあてた作品180点を紹介いたします。

デジタル写真の浸透によりフィルムの存在すら知らない世代も増えている昨今、写真技法の変遷と、写真にしかできない表現の豊かさは、これから写真がどこに向かうのかという問いにヒントを与えてくれることでしょう。

本展の見どころ

① 東京都写真美術館が世界に誇る珠玉の名品を多数公開！

本展では、1839年に世界で初めて写真術を世に送り出したウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボットが、1844年から46年までの間に6冊にわたって出版した世界初の写真集『自然の鉛筆』を公開します。日本で6冊がそろったコレクションは東京都写真美術館のみで、世界でも10カ所しかありません。また、世界初のカラー写真であるルイ・デュコ・デュ・オロン「アジャンの風景、木と水の流れ」（1872年）をはじめ、当館コレクションが誇る珠玉の名作を一堂にご紹介する貴重な機会です。世界で1つだけの作品や、貴重なプリントなど、展示室でしか鑑賞することのできない美しい名作の数々をどうぞご堪能ください。



マシュー・ブレイディズ・スタジオ 題不詳（母と二人の子供の肖像） 1840年代頃 ダゲレオタイプ

② 表現を支える「化学」とのかかわりを、わかりやすい技法解説で紐解く

写真術が発表された 1839 年以降、写真の印画（紙や金属やガラスなどの支持体の上に画像を焼き付けること）は、化学者や写真家たちの手によって、さまざまな方式が発明されてきました。本展では、化学的に改良を遂げていく印画の歴史と、それぞれの時代のなかで新しい表現を追求してきた写真家たちの熱い思いをご紹介します。それぞれの印画には特徴があり、最近では、昔の印画法を用いて作品制作をする現代作家も多くいます。黎明期から現代まで、写真ならではの表現の幅広さを感じられる当館ならではの作品群です。



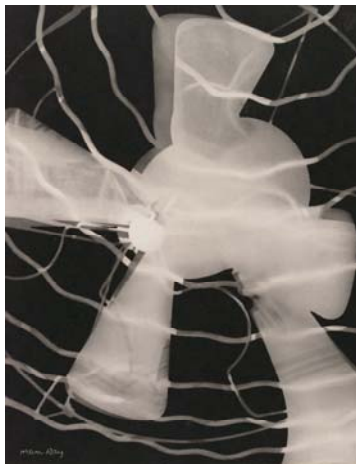
フランコ・フォンタナ
赤と緑、モデナ 1977年 銀色素漂白方式印画

③ 写真製版の魅力。無限に広がる写真の表現！

写真製版の発展は、写真の表現や鑑賞の方法を拓けました。印刷によって世界中の人たちが同じイメージを共有できたことは、現代の私たちでも簡単に想像ができます。そしてもう1つ重要なことは、印刷技術そのものが、新しい表現の手段として使われたことです。現代の大量複製のための印刷とは一線を画したその芸術性の高さを、数々の名品とともにご紹介します。

④ 関連ワークショップで、19世紀の写真の古典技法を体験！

展覧会の開催に合わせて、当時の写真技法を体験するワークショップを開催します。デジタル写真とはちがひ、時間をかけてじっくりと像を生み出す古典技法のプロセスをお楽しみください。当時の写真家たちが新しい表現を模索した様子を体験できることでしょう。



左上から）ウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボット 植物の葉 「自然の鉛筆」より 1844年 フォトジェニック・ドローイング／エドワード・ウェストン ノード 1936年 ゼラチン・シルバー・プリント／ポール・ストランド 写真—ニューヨーク 1917年 フォトグラビア印刷／アルフレッド・スティーグリッツ スナップショット、パリ 1911年 フォトグラビア印刷／マン・レイ「エレクトリシティ」より 1931年 フォトグラビア印刷／石元泰博 <とんできた色紙#3> 1989年 銀色素漂白方式印画

展示構成と、登場する主な写真技法をご説明します。（※詳細は出品リスト、技法解説をご参照ください）

第1章:紙の印画 Photographic Printing Paper

■タルボットからはじまる複製芸術の進化

ウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボットのフォトジェニック・ドローイングをさらに進化させたカロタイプによって、紙の印画を基にする写真術の歴史は幕を開けた。

カロタイプの優れたところは、アナログ写真のネガ・ポジ法の原型となる発明で、1枚のネガ像から同一のポジ像を複数得ることができる特質がある。しかし、発明当時の画像は不鮮明で画像も消えやすく、タルボットはこの技法にいくつかの特許を取得したため、使用も簡単ではなく、商業的成功を見ることはなかった。しかし、画像の階調のコントロールや紙の選択によって、作者の意図や心情を反映させる余地があり、不鮮明な輪郭が逆に柔らかな効果を生み出すことから、一部の芸術家たちはこの技法に注目した。

このネガ・ポジ法という考え方は、その後、ネガをつくるネガ現像法と、ポジをつくる印画技法とそれぞれ独自に発展させることになる。そして、印画技法は産業革命の発展と同調するように、商業的成功をおさめていく。印画紙の生産は工業化され、会社組織の工業製品として改良が重ねられ、安定した製品を大量に生み出した。単塩紙、鶏卵紙、プラチナ印画、ゼラチン・シルバー・プリント、ピグメント印画、カラー写真の印画など、時代のニーズに応えるように数々の技法が生みされていく。

＜紹介する技法＞ フォトジェニック・ドローイング／カロタイプ／単塩紙／鶏卵紙／プラチナ・プリント／ゼラチン・シルバー・プリント／カーボン・プリント／ゴム印画／ブロムオイル

フォトジェニック・ドローイング ウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボット（英）が1839年に発表した、世界初のカメラを使用しない写真プロセス。木の葉や鳥の羽を感光性のある紙の上に置き、太陽光で露光すると、光を受けた部分が黒に変化し、白と黒が反転したネガ像ができる。これを再び感光紙に密着させてポジ像をつくる。本展ではこのフォトジェニック・ドローイングを写真表現の重要な出発点として位置づけている。

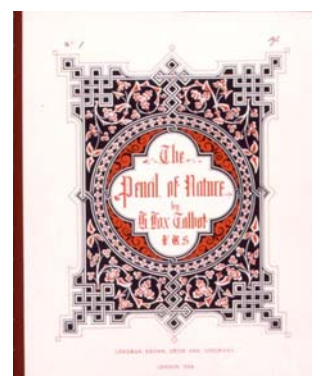
カロタイプ ウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボット（英）が1840年に発明した、紙をベースにしたネガ・ポジ法。カロタイプはギリシャ語で「美」を意味するカロスにちなんでいる。この技法によって複製が可能となり、19世紀から20世紀にかけて展開するアナログ写真印画の幕開けとなった

＜注目展示＞ 世界初の写真集！

ウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボット『自然の鉛筆』（1844～46年）

カロタイプ フォトジェニック・ドローイング

世界初の実用的な写真集。複製能力を持つ写真術ならではの“写真集”という形式にいち早く着目した、タルボットの先見の明が表れている。1844～46年にわたり、24枚の写真と自身の文章により6冊を刊行した。カロタイプの表現特性や用途について、タルボットが暮らしていた田園生活の光景や石造りの建造物、画像複製の技術を披露するための活字本や版画の複写などが、サンプルのための図版として掲載され、カロタイプの利用価値がいかに高いかをアピールしている。6冊の完全セットは、現在、世界に10セットしか現存しておらず、その1セットを東京都写真美術館が収蔵している。写真の発明から150年を記念して作られた1989年『自然の鉛筆』復刻版から24点の壁面展示と、1844～46年に刊行された6冊をショーケースにて展示する。



鶏卵紙 ルイ・デジレ・ブランカール＝エヴラール（仏）が1850年に発明した、19世紀を通してもっとも一般的かつ長期的に使われた印画紙。感光剤のひとつに卵の白身が含まれている。40年以上も紙印画の主流となり、ブランカール＝エヴラールは、フランスのリールに世界初の大規模な印画紙生産工場を開いた。

■写真製版(印刷技術の発達と、表現のオリジナル性)

＜紹介する技法＞ ウッドバリータイプ／フォトグラビア

ウッドバリータイプ 1864年にウォルター・ウッドバリー（英）によって特許申請され、写真印刷にもたらされた写真製版のプロセス。イギリスとアメリカで広く使用された。フランスではグーピル社がライセンスを取得し、当時の有名人や文化人たちの肖像写真を使った定期刊行の雑誌『ギャラリー・コンタンポレーヌ（現代人の画廊）』の写真には、この技法が用いられた。

フォトグラビア印刷 1879年、オーストリア在住のチェコ人カール・クリッチにより確立された。写真を大量に複製するための写真製版法の一つ。1880年代から1930年代にかけて、アルフレッド・スティーグリッツをはじめとするピクトリアリズムの写真家たちに多用された。

＜注目展示＞ フォトグラビア印刷の美しさ！

マン・レイ「エレクトリシテ」より
(1872年) フォトグラビア印刷
1931年にマン・レイが、フランスの電力会社 CPDE の広報用として制作したもの。10点組の全点を展示する。



■暗室技法、カメラを使用しない印画など

＜紹介する技法＞ フォトグラム／ソラリゼーション／ネガ・フォト

フォトグラム カメラを用いずに、印画紙や乾板上に物体を直接置いて露光し、その影を写し取る技法。19世紀より行われていたが、1920年代にモホイ・ナジやマン・レイらによって近代的な表現技法として“再発見”された。光と影によって印画紙に現れた階調の濃淡が、想像力をかきたてる。

ソラリゼーション ネガまたはポジを現像する過程で再度露光することによって、画像の一部の明暗が反転するという光化学現象にもとづき、マン・レイが名づけた。くっきりした輪郭線やネガ像とポジ像が入り混じる表現方法。

第2章: 金属・ガラス印画 Prints on Metal and Glass

■世界にひとつだけの写真

写真の発明としてはダゲレオタイプが世界初とされるが、カロタイプのように一回の撮影で何枚もポジ像が作れる複製の機能を持たなかった。

発明当初からしばらくの間は、細部の描写が優れていたことと、フランスが国をあげて、この技法を推進したこともあり、カロタイプよりも圧倒的な人気を博し、「ダゲレオタイプ・マニア」が出現するほど熱狂的反應を巻き起こした。特に商業的な肖像写真の分野で発展した。肖像写真のための営業写真館が登場した。そのなかでも、アメリカのマシュー・B・ブレイディはニューヨークに肖像スタジオを開き商業的にも成功し、作業工程を分業化するなど、大規模なプロダクション・システムを作り出した。

ダゲレオタイプは扱いに手間がかかり価格も高かったことから、アンブロタイプやティンタイプが、新たな代用として登場する。画像の精細の点では劣ったが、特にティンタイプはガラスのように割れることがなく、丈夫で軽量なため、郵送されることもあり、身近なものとして受け入れられた。

＜紹介する技法＞ ダゲレオタイプ／アンブロタイプ／ティンタイプ

ダゲレオタイプ ルイ・ジャック・マンデ・ダゲール（仏）が1839年に公表した世界最初の実用的な写真術。よく磨いた銀メッキの銅版に印画するため、日本では「銀板写真」と呼ばれていた。1回の撮影で1点しか作ることができなかったが、非常にシャープでクリアな画像は人々を魅了し、タルボットが発明したカロタイプよりも注目された。

アンブロタイプ フレデリック・スコット・アーチャー（英）が1851年に発明した湿式コロジオン方式を利用してポジ画像をつくる方式。1854年にジェームス・アンブローズ・カッティング（米）が「アンブロタイプ」という名称で特許を取ってから広く普及した。ダゲレオタイプの廉価版として特にアメリカで人気を博し、特に肖像写真のメディアとして活用された。

第3章:カラー写真の展開 Development on Color Photographic Processes

■カラー表現の追求ー不動の地位を築くまで

モノクロ写真が発展を遂げる一方で、カラー表現の追及も始まっていた。

研究者たちは、自然界のすべての色彩は赤、青、緑という三原色の組み合わせであると考えた。1861年にスコットランドの物理学者ジェームズ・クラーク・マックスウェルが、格子縞のリボンを写した3枚のランタンスライドのポジを重ね合わせ、カラー写真を生み出した。また、同時期にフランスで、ルイ・デュコ・デュ・オロンが同じような実験を試みエリオクロミイを発表している。しかし、彼らの試みは実用的なカラー写真として成功したとは言い難かった。

カラー写真の商業的成功は、1904年にフランスのオーギュストとルイのリュミエール兄弟が「オートクローム」を考案するまで、果たされなかったといっていだろう。コストが高くて露光時間も長く、撮影後の画像をビューワーで見なければならなかったが、意外にも多くの人に受け入れられた。しかし、この技法も色彩の自然さという点で改良の余地を残していた。

真の意味で、カラー写真が実用化されたといえるのは、1935年にイーストマン・コダック社のコダクロームという三層式のポジ・フィルムが発売されてからであろう。それ以後、カラー写真は大衆の間で圧倒的シェアを獲得し、その後、色素転写方式、拡散転写方式、発色現像方式、銀色素漂白方式などが開発され、不動の地位を得ていく。

＜紹介する技法＞ エリオクロミイ／オートクローム／色素転写方式印画／拡散転写方式印画／発色現像方式印画／銀色素漂白方式印画

エリオクロミイ 最も初期のカラー写真印画。ルイ・デュコ・デュ・オロンが1868年に作成した。シアン（緑青）、マゼンタ（赤紫）、イエロー（黄）の顔料による3色画像を重ね合わせた減法混色カラー写真印画。複雑な技法だったため、一般的な普及には至らなかった。

＜注目展示＞

世界初のカラー写真！

ルイ・デュコ・デュ・オロン「アジャンの風景、木と水の流れ」

（1872年）技法：エリオクロミイ

東京都写真美術館コレクションより

世界初のカラー写真。



オートクローム 世界で初めて商業的に成功したカラー写真。映画の発明で名高いリュミエール兄弟（仏）によって発明され、1907年から製造販売された。スライドのような、ガラス上の透明なカラー画像で、赤・青・緑の3原色に染められたジャガイモの澱粉の粒子を、不規則に分散させガラス板に塗る。さらに、3色モザイクフィルターと、モノクロ画像との組み合わせによって、微小の3色フィルターを透過する光の点描画像のような、カラー画像ができる。

拡散転写方式印画 物理学者エドウィン・ランド（米）が、1947年に発明したインスタント写真のシステム。当初はモノクロのみであったが、60年代に入るとカラー撮影が可能となった。ポラロイド社が製造する「ポラロイド」が最も主流であるが、同様の原理をもとに、コダック社も自社製品を発売するほか、富士フィルムでも「フォトラマ」などの製品を出している。

発色現像方式印画 カラー・ネガからカラー印画をつくる方式の総称。20世紀のカラー写真印画のなかで、最も普及したプロセス。カラー・ネガ・フィルムは1939年にアグファ社、1942年にコダック社から発表されたが、当初は高価であったため、広告写真以外ではあまり使用されなかった。1970年代に入り価格が安くなると、一般社会でもモノクロ写真からカラー写真に移行する。1970年代後半以降、「ニュー・カラー」派の写真家たちによって使われる。

関連イベント

① 担当学芸員によるフロアレクチャー

会期中の第2・第4金曜日、16時より担当学芸員による展示解説を行います。

② 関連ワークショップ

8月18日（土）・19日（日）に関連ワークショップを開催します。詳細は決定次第、当館ホームページで発表します。

関連書籍のご案内

「光と影の芸術——写真の表現と技法」 平凡社刊 定価 2,625 円（税込）

本年度、写真における表現と技法をテーマに開催されるコレクション展「光の造形—操作された写真」（7月8日まで開催）、「自然の鉛筆 技法と表現」（本展）、「機械の眼 カメラとレンズ」（9月22日より開催）の各展より、主な出品作品と担当学芸員のテキストを掲載した関連書籍を発売中です。

開催概要

展覧会名 自然の鉛筆 技法と表現（英名：The Pencil of Nature: Technique and Style）

会 期 2012年7月14日（土）～2012年9月17日（月・祝）

会 場 東京都写真美術館 3階展示室

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

ホームページ www.syabi.com 電話 03-3280-0099

主催関係 主催＝東京都 東京都写真美術館／協賛＝凸版印刷株式会社／協力＝平凡社

開館時間 10:00～18:00（木・金は 20:00 まで）※入館は閉館の 30 分前まで

休館日 毎週月曜日（ただし月曜日が祝日の場合は開館し、翌火曜日休館）

観覧料 一般 500（400）円／学生 400（320）円／中高生・65歳以上 250（200）

※（ ）は 20 名以上の団体料金 ※東京都写真美術館友の会会員、小学生以下および

障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料 ※第3水曜日は 65 歳以上無料

交通機関 JR 恵比寿駅東口より徒歩約 7 分／東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩約 10 分

※当館には専用の駐車場がありません。お車でご来館の際は近隣の有料駐車場をご利用ください。

お問い合わせ

東京都写真美術館 電話：03(3280)0034 FAX：03(3280)0033

展覧会担当 鈴木 佳子 y.suzuki@syabi.com

広報担当 久代 明子 a.kushiro@syabi.com 平澤 綾乃 a.hirasawa@syabi.com

前原 貴子 t.maehara@syabi.com

プレス掲載用に図版データをご用意しています。上記広報担当までお問い合わせください